

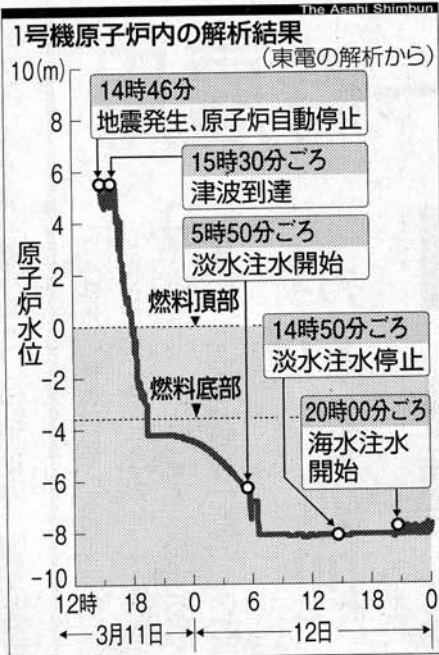
水素漏れ予兆は観測

1号機 建屋にたまり爆発

福島第一原発1号機の事故は発生当初から、関係者の想定以上に事態が急激に悪化していた。今後、東京電力の事故発生後の認識や対応が適切だったのか、検証が必要になる。

▼1面参照

東電の暫定的な解析によると、地震発生4時間半後



核燃料を収めた圧力容器

の外の格納容器には原発の運転中、酸素がほとんどなく、水素ガスが漏れ出ても爆発のおそれはなかった。だが、酸素がある外側の建屋に何らかの経路で漏れたことで、12日午後3時半過ぎの爆発につながった。

原子炉建屋の水素爆発は予見できなかったのか。東電の松本純一原子力・立地本部長代理は5月15日の会見で「原子炉内での水素発生は予想していたが、建屋内にたまって爆発することは考えていなかった」と話した。

しかし今回の解析と照らし合わせれば、爆発の前兆を疑わせるデータがある。東電が国などへの連絡用に作った資料によれば、1号機タービン建屋1階で、原子炉建屋内とつながる二重扉に近い場所では、3月11日午後11時に放射線量が毎時1・250・5ミ

シーベルト観測されていた。この予兆をつかんでいれば、爆発の予測や被害を抑える対応が検討できたかもしれない。

原子炉内で当時、大量発生していた蒸気や水素ガス

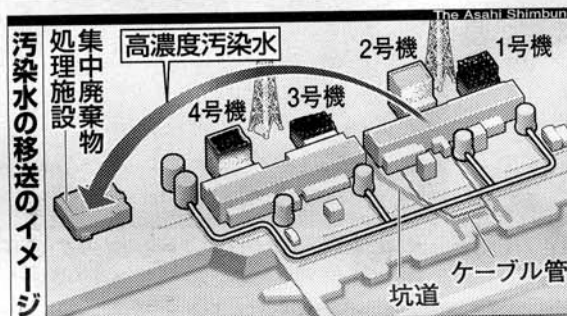
処理施設周辺 地下水が汚染

漏れた疑いも

東京電力は15日、福島第一原発で、高濃度の汚染水の保管場所としている「集中廃棄物処理施設」の周辺で、地下水の放射性物質の濃度が上がっている、と発表した。汚染水が漏れ出した疑いも否定できず、汚染水の処理計画の見直しを迫られる可能性もある。

濃度が上がったのは、4号機の発電機があるタービン建屋の南東部分。地下水

で原子炉内の圧力が高まり、配管や弁にすき間が生じた可能性がある。放射性物質を含む蒸気が建屋内まで漏れ、水素ガスも同じ経路を通ったことが疑われる。(小堀龍之)



した。一方、原子力安全・保安院の西山英彦審議官は会見で「集中廃棄物処理施設の中の水が水位が低いので漏れ出しているとは考えにくい」と話した。